

11. Stanford A 型大動脈解離の緊急手術に腋窩動脈送血を用いた手術成績

越谷病院 心臓血管外科

田中恒有、入江嘉仁、垣伸明、佐藤康広、秦一剋、汐口壯一、斎藤政仁、岡田修一、今関隆雄

目的：急性大動脈解離の緊急手術時に大腿動脈送血は多用されるが、壁在血栓の逆行性撒布や臓器の不適切な灌流などの問題点を持っている。これに対し、腋窩動脈送血は真腔への順行性灌流が可能であり、より理想的な送血部位とされる。我々は 2001 年 4 月より、急性大動脈解離に対する緊急手術の際、腋窩動脈送血を第一選択としてきた。今回、その手術成績を検討し報告する。

対象・方法：2001 年 4 月から 2003 年 4 月までの Stanford A 型大動脈解離手術のうち、腋窩動脈の解離症例と心肺蘇生のため大腿動脈を使用した症例を除いた 18 例(82%)を対象とした。手術は右腋窩動脈に縫着した 10mm 人工血管内部に 24Fr. カニューレを挿入し送血路とした。手術開始から腋窩動脈送血開始までの所用時間は平均 77 分で、これまでの大動脈送血症例とは有意差がなかった。

結果：破裂症例のうち 2 例(11%)を術後の脳梗塞から多臓器不全(MOF)で失い、他は順調に経過した。(1)Stanford A 型大動脈解離の急性期手術において、腋窩動脈に人工血管経由で送血し至適灌流量が得られた。(2)大腿動脈送血に比し、術中送血部位を変更する煩雑さが省けた。(4)腋窩動脈の確保と人工血管縫着に所用する時間は許容範囲内で、関連する合併症はなかった。

12. 妊娠中毒症患者の胎盤組織内・末梢血中における顆粒球マクロファージコロニー刺激因子濃度の増大

越谷病院産科婦人科

安藤昌守、林 雅敏、堀中奈奈、友部勝実、濱田佳伸、矢追正幸、堀中俊孝、榎本英夫、大藏健義
目的：胎盤の分化と増殖に関与する顆粒球マクロファージコロニー刺激因子 (GM-CSF) が妊娠中毒症の発症に関与している可能性があり、胎盤組織と血清における GM-CSF の濃度を測定した。

対象・方法：妊娠中毒症患者 18 人と正常妊婦 20 人から約 2g の胎盤組織と末梢血（血清）を採取して、凍結した。この凍結胎盤組織を試験管に入れ、PBS を加えて、ホモゲナイザーで均質化した。この上清および血清中の GM-CSF 濃度を ELISA 法にて測定し、上清中の蛋白 (TP) 濃度も測定した。上清は GM-CSF/TP の濃度で表示した。

結果：血清中も胎盤組織内も、妊娠中毒症患者の方が高い GM-CSF 濃度を認めた。この結果、GM-CSF の妊娠中毒症病態への関与が示唆された。